研　究　報　告

日本赤十字社の看護師等養成施設・病院における看護歴史資料の所蔵・保存・利用状況調査

殿城　友紀，川原　由佳里，山崎　裕二，川嶋　みどり

A Survey of Collection, Preservation, and Utilization of Historical Materials which are Owned by Training Facilities and Hospitals of the Japanese Red Cross Society

TONOKI Yuki，KAWAHARA Yukari,
YAMAZAKI Yuji，KAWASHIMA Midori

キイワード：日本赤十字社、看護史、看護師養成、史料、調査
Key Words：the Japanese Red Cross Society，nursing history，nurse training，historical materials，survey

Abstract

The purpose of this study is to clarify collection, preservation, and utilization of Historical Materials which are owned by Training Facilities and Hospitals of the Japanese Red Cross Society.

A questionnaire was sent to 124 Training Facilities and Hospitals of the Japanese Red Cross Society, and 77 responded.

As results, these facilities and hospitals administer historical materials by their own way. Their ways for preservation and utilization are inadequate because of in the absence of people in charge of administrator, lack of budget, storage, and knowledge.

Some Training Facilities and Hospitals of the Japanese Red Cross Society have reorganized, integrated, and closed in recent years, which caused by educational innovation or dilapidated buildings. There is to be apprehensive about the future for historical materials owned by them.

It needs further study, and it is necessary to enlighten people and maintain database for administration, to structure network among facilities and hospitals.

要旨

本研究の目的は、日本赤十字社の看護師等養成施設・赤十字病院の看護歴史資料の所蔵・保存・利用状況を明らかにすることである。日本赤十字社の看護師等養成施設・病院124施設に調査票を配布し、77施設より回収した。結果、これらの施設の多くが看護に関する資料を所蔵し、独自に収集・保管・利用して

日本赤十字看護大学

受付日：2007年10月１日
採用日：2007年12月26日

いることが明らかにされた。しかし、人員不足・担当者の不在・予算・所蔵場所・知識不足の理由により十分な保存・利用がなされていない現状があった。近年、教育改革や施設の老朽化などから改組・統合・閉校・閉院などが進んでおり、歴史的に価値のある資料の廃棄・損傷・紛失などが懸念される。今後さらに調査を進め、歴史的に価値のある資料の保存に関する啓発を行うこと、史料の収集・保存・利用を有効に行うためのデータベース化や各施設間のネットワークづくりの必要性が示唆された。

Ⅰ．はじめに

日本赤十字社病院での看護師養成が開始されてから今年で110余年である。日本赤十字の看護といえば、戦時・災害時の救護看護師による活躍が一般的に知られているが、日本赤十字社が国家的な規模で保健医療を担うマンパワー養成を行ったことは、世界の他の赤十字組織にはあまり例を見ない歴史上の特徴である。

日本赤十字社の看護師養成に関する歴史研究は、その中枢的機関であった東京の日本赤十字社（中央）病院での養成に焦点をあてたものが多い（亀山，1984）。支部での看護師養成の実態や支部卒業生の動向、それに影響を及ぼした各地方の事情や本社との関係等を明らかにする研究は少なく、さらに全体的な観点から日本赤十字社の看護師養成を明らかにしようとするものは見当たらない。

日本赤十字社の看護師養成の全体像を明らかにするためには関連史料の発掘が不可欠であるが、現在のところ全国各地の養成施設、実習病院がどのような史料を所蔵し、保管管理しているかについては十分に明らかにされていない。過去、日本赤十字社の行った調査は支部のみが対象で、看護師養成の拠点となる養成施設や病院は含まれていなかった（日本赤十字社企画広報室，1999）。また高橋ら（2006）は全国の看護系教育機関、病院、関連団体、日本赤十字社・各支部、図書館・博物館などの広範な対象に、看護関連史料の所蔵状況を調査しているが、所蔵されている史料の詳細やその保管・利用方法については明らかにされていない。

現在、日本赤十字社では関連史料の蓄積や公開は、各施設や個人の意思に任されている状況である。また近年では養成施設や病院の統廃合、建物そのものの老朽化によって閉鎖、改築、移転などが行われており、史料の散逸が危惧されている。その意味でも日本赤十字社の看護婦養成施設ならびに病院を対象に、所蔵されている看護関連史料を調査し、各施設の保管利用状況を確認することで、史料散逸や劣化の防止に向けた対策を考えることが必要と考えた。

以上により、本研究では、日本赤十字の看護師等養成施設（以下、養成施設と呼ぶ）・赤十字病院（以下、病院と呼ぶ）の看護歴史資料の所蔵・保存・利用状況を明らかにすることを目的として調査を実施した。

Ⅱ．研究方法

Ａ．研究デザイン

質問紙を用いた調査研究である。

Ｂ．調査対象

2006年時点における日本赤十字社の看護師等養成施設33校と赤十字病院91施設の計124施設とした。

Ｃ．調査期間

2006年６月10日～８月31日

Ｄ．調査の枠組

質問紙は、高橋ら（2006）による「日本の看護歴史関連史料の専門的基盤整備のための調査研究」において使用されたものを参考にした。全国の看護師等養成施設と病院がどのような史料を所蔵しているかが分かるように、貴重な史料の目録の送付を依頼し、ない場合には所蔵資料のリスト作成を依頼した。また、保管利用状況の詳細を明らかにするため、保存方法やそのための予算、展示の実際などについて質問項目を追加した。（表１）

Ｅ．調査方法

全国の養成施設学長ならびに病院の事務長宛に研究班より直接調査票を郵送し、返信用封筒により回収した。

Ｆ．分析方法

各項目の記述統計を行い、自由記述については内容

表１．調査内容

１．養成施設・病院プロフィール
２．出版物の有無（沿革史・同窓会誌等）
３．看護関連史料の所蔵
４．看護関連史料の収集計画
５．所蔵物の保存管理ならびに問題点
６．所蔵物の利用状況
７．看護婦養成または救護・医療活動に関する重要な史料
８．赤十字の看護・医療に関する史料の収集・保存・利用に関するご意見（自由記述）

に基づいて分類し、分析を行った。

G．倫理的配慮

回答は各施設の自由意志に委ねた。回答内容はリスト作成時など所蔵場所を明記する必要がある場合を除いて、養成施設・病院が特定されないよう匿名で処理し、調査結果は還元した。

Ⅲ．結果

A．回収率

調査用紙を配布した124施設中77施設から回収された。回収率は62.1%であった。そのうち看護師等養成施設の回収率は69.7%（33施設中23施設）、病院の回収率は59.3%（91施設中54施設）であった（表２）。

以降、各々の結果についての割合は各設問の有効回答数に対して算出した。

B．出版物の有無

沿革史と同窓会関連の出版物の発行状況について質問した。各施設の沿革史の発行状況については「発行している」と回答したのは養成施設の43.5%、病院の59.3%であった。「作成する予定である」と回答したのは養成施設の13.0%、病院の9.3%であった。同じく同窓会関連の出版物を「発行している」と回答したのは、養成施設の69.6%、病院の66.7%であった。

C．看護関連史料の所蔵

看護に関連のある歴史的に貴重な史料の所蔵状況を知るために、所蔵している史料の種類、その史料の年代について質問した。看護に関する貴重な史料を「所蔵している」と回答したのは、養成施設の87.0%、病院の50.0%であった。

所蔵物の種類（複数回答）については、図１に示したとおり、「写真」が39.0%と最も多く、次いで「書籍・雑誌・新聞」が35.1%、「書類（管理・運営関係、名簿、成績、教育計画、教務日誌など）」が32.5%であった。

所蔵物の年代（複数回答）を図２に示した。「昭和後期（昭和40年～平成元年）」が45.5%と最も多く、「昭和中期（昭和20年～40年）」が40.3%、「昭和初期（昭和元年～20年）」が36.4%であった。「明治期」が14.3%、「大正期」が16.9%であり、古い年代の史料も所蔵されていることが明らかになった。なお、所蔵物の年代は養成施設・病院ともに同様の分布を示した。

表２．調査票回収率

	配布数（施設）	回収数（施設）	回収率（%）
全体	124	77	62.1
養成施設	33	23	69.7
病院	91	54	59.3

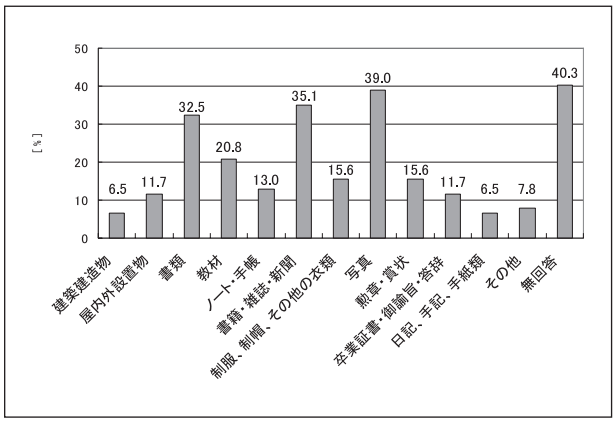

図１．所蔵物の内容

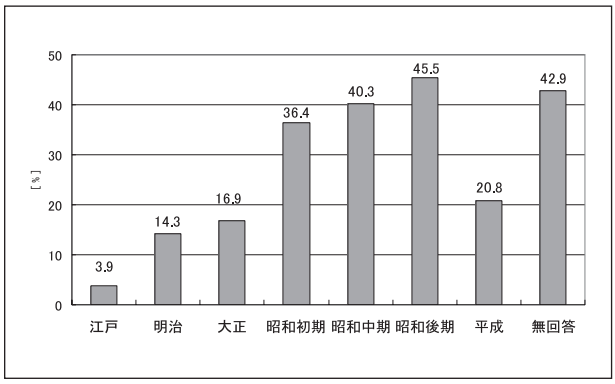

図２．所蔵している史料の年代

次に所蔵資料のなかでも、養成施設ならびに病院の設立・運営に関する書類は重要と考えられたので、それらの保管状況について質問した。学校設立・運営に関する書類を「保管している」と回答したのは、養成施設の82.6%、病院の38.9%であった。しかし「保管上の取り決めがある」と回答したのは養成施設の34.8%、病院の11.1%にすぎなかった。

D．看護関連史料の収集計画

看護関連史料を収集する計画があるか、そのための予算があるか、また寄贈の呼びかけを行っているかについて質問した。収集計画については「ある」と回答したのは養成施設の13.0%、病院の1.9%にすぎなかった。さらに収集計画がある施設で「予算措置がある」と回答したのは１施設のみであった。史料の寄贈を「呼びかけている」と回答したのは、養成施設の8.7%、病院の1.9%であり、ほとんどなされていないことが明らかになった。

E．所蔵物の保存管理ならびに問題点

看護関連史料の保存管理状況を知るために、所蔵場所、保存方法、保存のための予算、保存管理上の問題点について質問した。所蔵場所が「ある」と回答したのは養成施設の52.2%、病院の40.7%であった。所蔵

場所は主に図書室、倉庫、事務室であったが、なかには赤十字コーナーや貴重図書コーナー、文書庫を設け、保存している施設もあった。

保存方法に関して温度・湿度のコントロール、紫外線防止、虫害予防などの配慮をしている施設はほとんどなく、また保存のための予算措置が「ある」施設は1施設のみであった。保存管理上の問題点については自由記述にて質問したが、「所蔵場所がない」、「担当者の不在・人員不足」、「価値の査定ができない」、「保管・管理方法が分からない」、「予算がない」といった問題が挙げられた。

F．所蔵物の利用状況

所蔵物の利用状況を知るために、閲覧･貸出の可否、利用規則の有無、目録の有無、目録公開の可否、展示の有無、展示場所、展示のための予算について質問した。

所蔵物の利用状況については、「閲覧が可能である」と回答したのは養成施設の56.5%、病院の48.1%であった。「貸し出しを行っている」のが養成施設の39.1%、病院の31.5%、「利用規則がある」のが養成施設の34.8%、病院の25.9%であった。「目録がある」と回答したのは養成施設の39.1%、病院の14.8%であったが、「目録を一般公開している」と回答したのは養成施設の17.4%、病院の3.7%であった。

所蔵物の「展示を行っている」と回答したのは養成施設の26.1%、病院の11.1%にすぎず、展示場所は展示室・展示コーナー、学内（講堂・ホール）などであった。展示のための「予算措置がある」施設は１施設のみであった。

G．貴重史料

各施設で所蔵されている看護関連史料の詳細を知るために、各施設が貴重と考える史料について、各施設の判断で記載するよう依頼した。調査票には計のべ806件が記入された。主要なものを表３に示した。施設の創立時に関する文書をはじめ、生徒名簿、看護教育に関する書籍・教科書・掛図、学生や卒業生の活動

表３．重要な史料（主要なもののみ掲載）

種類	史料標題	所蔵	備考
文　書	看護学院設立時文書（昭和 24 年）	高山赤十字病院	
名　簿	看護婦生徒名簿（明治～昭和）	日本赤十字看護大学	（写真 1）
書　籍	日本赤十字社　看護学教程（明治 29 年）	日本赤十字看護大学	（写真 2）
	フローレンス・ナイチンゲール著 「看護覚え書」初版、「病院覚え書」第 2 版	日本赤十字看護大学	
	救護員生徒教育資料（明治 44 年）	日本赤十字武蔵野短期大学	
	大嶽康子著　病院船（昭和 14 年）	前橋赤十字看護専門学校	（写真 3）
掛　図	日本赤十字社　救護員服装図（年代不明）	高山赤十字病院	（写真 4）
記　録	日本赤十字社原爆病院診療記録（昭和 30 年代） 原爆被爆者解剖例　疾患別分類	広島赤十字・原爆病院 大津赤十字看護専門学校	
手　紙	日本赤十字社第 508 救護班の記録 - 特設海軍病院船天応丸	高山赤十字病院	
写真原版	ナイチンゲールの写真　ガラス原版	大阪赤十字病院	（写真 5）
音声記録	ナイチンゲールの肉声入りレコード	日本赤十字看護大学	
物　品	赤十字マーク入り鞄	松山赤十字看護専門学校	

写真１．看護婦生徒名簿（日本赤十字看護大学所蔵）

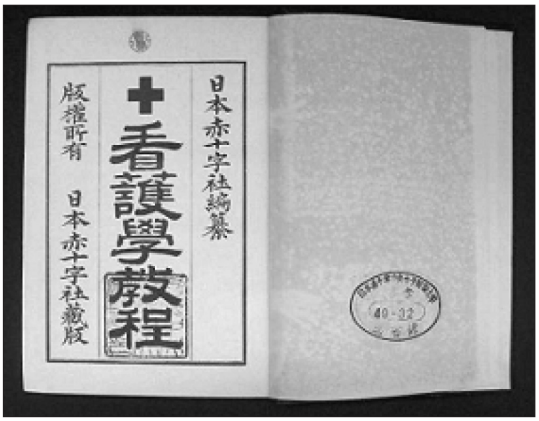

写真２．日本赤十字社　看護学教程（明治29年）
（日本赤十字看護大学所蔵）

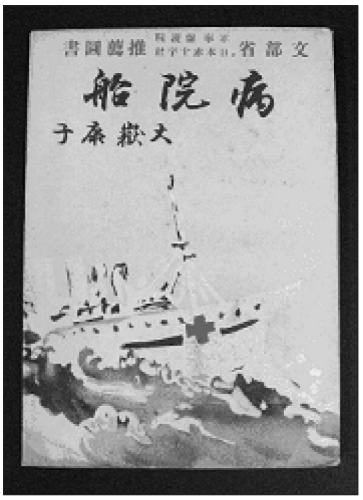

写真３．大嶽康子著 「病院船」
（前橋赤十字看護専門学校所蔵）

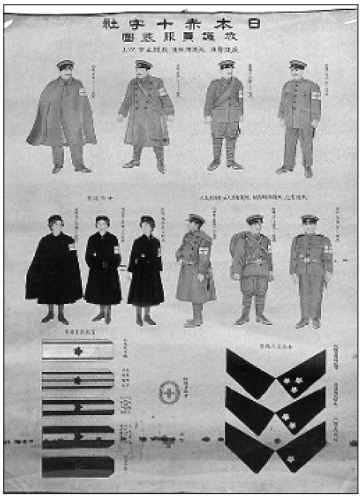

写真４．日本赤十字社　救護員服装図（年代不明）
（高山赤十字病院所蔵。写真は日本赤十字社創立125年記念展p.48より引用）

が記された書籍・文書・手紙・写真などの史料が記載されていた。

H．赤十字の看護・医療に関する史料の収集・保存・利用に関する意見

最後に、赤十字の看護・医療に関する史料の収集・保存・利用に関する回答者の意見を質問した（自由記述）。

寄せられた意見を内容に基づいて分類し、分析を行った。内容を表４に示した。①貴重な史料の破棄・散逸の危機感、②史料を保存し、後世に残していく意義・必要性、③寄贈の呼びかけによる史料収集の必要性、④調査の必要性、⑤知識不足による整理・保存の不十分さ、⑥体制づくり（人員・予算・場所・ネットワーク）の必要性、⑦学生・職員教育や一般の方々の赤十字活動への理解を得るための利用に関する意見が寄せられた。

ガラス原版　　現像したもの

写真５．ナイチンゲールの写真　ガラス原板
（大阪赤十字病院所蔵）

Ⅳ．考察

A．所蔵史料

以上の調査から、日本赤十字社の看護師等養成施設・病院が看護の歴史を解明していく上で貴重な史料を所蔵していることが明らかとなった。高橋ら（2004）の研究結果では歴史資料を所蔵している看護師等養成施設の割合は39.3%とされており、今回の調査で日本赤十字社の看護師等養成施設のみを対象としたときの割合が87.0%であったことからみても、特に、日本赤十字社の養成施設では一般の養成施設よりも史料を所蔵している割合が高いことが明らかになった。今回の調査では回答が得られた施設は限られており、また史料が貴重であるかどうかの基準が曖昧であるなどの限界はあるが、調査によって明らかになった各施設の所蔵史料は、日本赤十字社の看護婦養成のみならず日本の看護歴史研究に不可欠なものも多いと思われ、その一覧が得られたことの価値は大きいと考える。

所蔵物の内容については、年代別の分析を通じて昭和期の史料が多いことが明らかになった。これは戦後になって全国的に養成施設や病院が設立されたことが理由と考えられる。明治から戦前までの看護婦養成に関する史料が貴重なのは言うまでもないが、戦後の復興期における看護婦養成の研究も系統的に行われていないのが実情であり、それらの史料の価値は決して低くない。また今後その紛失を防止する対策を練る必要性は高いと考えられる。

B．史料の保存・収集

調査からは、現在のところ看護師等養成施設と病院は史料の収集計画をほとんどもたず、また保存管理、利用も十分にはなされていないことが明らかとなった。この理由としては、管理方法の規定がなく管理が各施設に委ねられていること、人員不足・担当者不在といったマンパワーの問題、所蔵・保管場所の問題、予算がないといった経済的な問題、価値の査定・管理

表４．赤十字の看護・医療に関する史料の収集・保存・利用に関する意見

①貴重な史料の破棄・散逸の危機感
戦災にも遭い、明治～昭和にかけて系統だった形で史料は残されていない。 所蔵しているものの歴史的価値が正しく理解されず、失ってきたものが多いと思われる。 新病院の新築移転の際、貴重な史料を破棄してしまったのではと悔やまれる。 全面的増改築により、歴史的資料については殆ど処分されたのではないかと考えられる。 資料管理責任者がいなかったり、個人的に歴史的資料に関心のある人がいなくなると、いずれ散逸してしまう。
②史料を保存し、後世に残していく意義・必要性
赤十字の看護・医療に関連する史料を保存することは非常に有意義で大切なことだと考える 長い赤十字の歴史として多くのものが残っていくことを期待する。 貴重な史料として保存し、継承し、整備していくことが必要である。 赤十字全体として、保管・管理できればその歴史を後世に伝えていくことに繋がっていくものと思われる。
③寄贈の呼びかけによる史料収集の必要性
存命の方々からの資料提供（昭和初期のもの）は急ぐ必要ありと考える。 関係史料の寄贈等を呼びかけ、赤十字の歴史などを伝えられるよう努力していきたいと考える。 看護師養成に限らず、看護や医療活動などの歴史的史料の提供を幅広く呼びかけ協力いただくことを希望する。
④調査の必要性
このような調査を定期的に行う必要性がある。 この調査があり学校内の史料を確認する機会となった。 日本の看護の歴史の一画をなすものであると思うので、まとめることは有意義である。 赤十字の看護教育には長い歴史と伝統があり、その史料は歴史的価値が高いと思われ、調査は必要である。
⑤知識不足による整理・保存の不十分さ
大事に保管してきたものがあるが、整理・保管・管理が十分でない。 貴重な史料が埋もれていて活用されていなかったと、閉校に関わる整理をしていて感じた。 赤十字の史料の保存が充分でない。 書類に関してはどのように分類、保管するとよいのか具体的に教えてもらいたい。 価値を分かる人がどこにいるのか知りたい。
⑥体制づくり（人員・予算・場所・ネットワーク）の必要性
収蔵場所がない。 歴史的に価値のある貴重な史料は何カ所かに集約して保存し、活用すれば良い。 現在は看護学校の後利用が決まっていないので保存できているが、今後検討しなければならない。 史料の収集・保存については人員と予算が必要である。 予算や人員配置の義務化を指示してもらうと、動きやすい。 所蔵史料の状況を赤十字関連施設全体で共有できる体制を整える。 赤十字各施設の収蔵物について、データベース等の整備がされても良い。
⑦学生・職員教育や一般の方々の赤十字活動への理解を得るための利用
インターネット等で検索し、諸史料が活用できるようになれば良い。 ホームページ等で史料を公開し、気軽に利用できると多くの国民に赤十字を知っていただける機会となる。 展示等を通じて広く一般の方々に公開できるとよい。 病院に赤十字コーナーを設置し、現存する史料や図書・パンフレットを閲覧できるようにしたい。 学生の時から身近に学べる史料があることにより、歴史を通じて現在の日本の医療のあり方を知ることができる。 学生の講義で適宜利用すれば、赤十字・赤十字人としての在り方等が体感していけるのではないかと思う。 史料によって伝統ある赤十字の看護・医療の歴史を現職員に伝え、赤十字職員としての意識を高める。 赤十字看護師としての自覚や将来の活動に繋がることを願う。 赤十字専門学校以外の看護師の採用も増えていることから、図書等の公の所に保存し活用すると良いと思う。

方法が分からないといった知識・技術の問題、閉校や建物の改築など施設の状況の変化が考えられる。どの施設でも、個人的に史料に興味のあるものがいなければ十分な保存が行われないのが実情と考えられた。

また本調査を実施しているなかで、筆者らはいくつかの施設から「受け入れ機関がないためつい最近、史料を破棄した」、「災害によって焼失した」などの情報を得ることもあり、今現在も失われつつある史料があることが感じられた。また保存されている史料も、保存管理の問題によって破損や劣化などが進んでいる可能性も考えられる。

今回調査した史料は看護歴史研究の基盤となるものである。看護歴史関連史料の保存と活用に関する取り組みについて、高橋らが2007年に実施した調査によれば、諸外国では歴史資料管理ソフトにより目録を作成し、インターネット検索を利用できるなどの取り組みが行われていることが報告されている。本研究においても、対象となった施設からの同様の取り組みを希望する意見があり、今後さらに調査を進め、歴史的に価値のある史料を把握し、データベース化を行うととも

に、その散逸・劣化を防ぐため、保存や管理、利用に関する啓発を行うためのネットワークづくりなどの対策が必要と考えられる。

V．結論

日本赤十字社の看護師等養成施設・病院は貴重な看護歴史資料を所蔵し、各施設が独自に収集・保管・利用しているということが明らかにされた。しかし、人員不足・担当者の不在・予算・所蔵場所・知識不足といった問題から十分な保存・利用がなされていないという現状があった。今後の調査の必要性･史料の収集･保存・利用を有効に行うためのデータベース化やネットワーク作りの必要性が示唆された。

謝辞

本研究にご協力くださいました皆様に深く感謝申し上げます。

なお本研究は、日本赤十字学園の平成18年度「赤十字の看護・介護に関する研究」の助成を受けた「日本赤十字社の看護師養成に関する史料の保存編纂に関する研究」の一部であり、その要旨は第８回日本赤十字看護学会学術集会（2007年６月）において発表しました。

文献

亀山美知子（1984）．近代日本看護史Ⅰ日本赤十字社と看護．東京，ドメス出版

川原由佳里・吉川龍子・川嶋みどり（2007）．日本赤十字社病院・同中央病院における看護婦・人等養成に関する歴史的資料の基本調査：日本赤十字看護大学所蔵分について．日本赤十字看護大学紀要，21，55-62.

高橋みや子（2004）．日本の看護歴史関連史料の専門的基盤整備のための調査研究．平成14・15年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（1））研究成果報告書.

高橋みや子（2007）．諸外国における看護歴史関連史料の保存と活用に関する調査研究．平成16～18年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（1））研究成果報告書.

日本赤十字社企画広報室（1999）．日本赤十字社史料（都道府県支部分）調査のまとめについて．日本赤十字社資料.

日本赤十字社企画広報室（2002）．日本赤十字社創立125周年記念展．日本赤十字社.

石川操・村上美好・鎌田治子・中村美知子・竹内光子・吉川龍子（1980）．日本赤十字中央女子短期大学90年史．東京，日本赤十字中央女子短期大学.